

国際交流事後活動ニュース

MACRO COSM

マクロコズム '94.11



財青少年国際交流推進センター

vol. 1

国際青

1994年7月11日

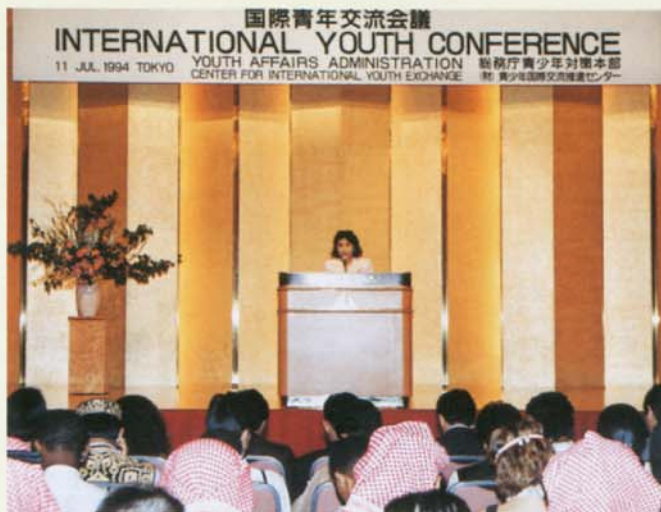
東京全日空ホテル



会議終了後には、皇太子同妃両殿下の御臨席の下にレセプションが催されました。山口鶴男総務庁長官の挨拶、参加青年を代表してトンガ王国のオリピナ・ムリキハ・アメアさんの会議報告、宮路和明総務政務次官の発声による乾杯の後、両殿下を交えた国際色豊かな懇談のひとつとなりました。会場には笑顔が溢れ、談笑のざわめきが絶えませんでした。



年 交 流 会 議



猪口教授

国際青年交流会議は、皇太子同妃両殿下の御成婚を記念して、総務庁が平成6年度から新たに実施している国際青年育成交流事業のプログラムの一つとして開催された国際会議で、同事業に参加した日本青年、外国青年等約300人が一堂に会しました。



参加青年が一堂に会した会場では、まず、上智大学教授の猪口邦子氏から「国際交流の在り方について」と題する基調講演が行われ、続いて、作家の神津カナ子氏とNGO「シャプラニール」の下沢嶽氏による基調報告が行われました。いずれも各自の国際交流体験に基づいた示唆に富む内容で、青年たちは熱心に聴き入っていました。

参加青年たちが8つのグループに分かれて行った分科会では、基調講演と基調報告の内容を踏まえて、青年交流の在り方、事業参加後の連携の在り方などについて、活発な議論が展開されました。

青年たちにとっては、相互の理解と友好を深める恰好の機会となりました。





坂本
昇一
評議員



設立記念パーティー



山田
馨司
理事長

1994年5月20日
東京全日空ホテル



創刊のことば

財団法人青少年国際交流推進センター
会長 石川 忠雄

財団法人・青少年国際交流推進センターは、本年4月の設立以来、総務庁青少年対策本部及びIYEO（日本青年国際交流機構）との密接な連携の下に、皇太子殿下御成婚記念事業として始められた総務庁の平成6年度国際青年育成交流事業（外国青年招へい）や、IYEO主催の第7回SSEAYP国際ショナル総会、アジアのこども絵画展、韓国青少年指導者招へい事業及びIYEO第10回全国大会などのお手伝いをさせていただき、併せて、青少年国際交流全国フォーラムを主催してまいりました。



この間、多大な御支援をいただいた関係者の皆様に、この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

さて、この度、青少年対策本部及びIYEOの御協力をいただき、青少年国際交流に関する情報誌を発刊する運びとなりました。青少年対策本部の長年にわたる国際交流事業を通じて積み上げられ

てきた成果の最も大きなものの一つに、既参加青年の事後活動として全国各地で行われている国際交流活動があります。これらの活動を更に活発にし、内容の豊かなものにするのに役立つ情報を提供しようというのが、本誌の目的です。

誌名は「マクロコズム」、大宇宙という意味です。大宇宙から見れば、地球上の人類の間の民族や宗教の違いなど取るに足りないささやかな違いです。そんな違いに基づく争いや殺し合いのない平和な世界の実現を念願しています。内容は、これまでのIYEOの機関紙「コズミック」と青少年対策本部の事後活動ニュース「青年国際交流」を吸収、統合し、大幅に充実したものにしたいと考えています。

新しい世紀が国際性豊かな青年たちを待っています。「マクロコズム」が、既参加青年の皆さんがこれまでに築いた自分の小宇宙から出て、より大きな宇宙に国際交流の輪を広げていく契機になれば幸いです。

***** 主な内容 *****

全国大会	7	IYEO たより（山口）	16~17
アセアン・シリーズ	8~9	各地の活動紹介（宮崎）	18~19
国際青年育成交流事業	10~11	お知らせコーナー	20
国際交流の在り方について	12~15	世界の国際交流活動	21
（猪口邦子氏の講演より）		全国大会船上写真	22

〈表紙の説明〉

インドネシア・6才の
Intan Sari Dew ちゃんの
「夢で出会ったモンスター」
アジアのこども絵画展より
優秀賞受賞作品



ネットワークの確立に向けて——

総務庁青少年対策本部

次長 上村 知昭

青少年国際交流に関する情報誌「マクロコズム」の発刊を心からお慶び申し上げます。

近年、国際社会においては、相互依存関係が深化し、人や情報の国境を越えた流れがますます盛んになっています。また、環境問題をはじめとして、地球規模で考え、対処しなければならない問題が顕在化、深刻化してきました。このような状況にあって、次代を担う青少年が広く世界に目を向け、豊かな国際性を身に付けることの重要性が、これまでにならぬほど高まっていると言えるでしょう。

国際的地位の向上に伴い、我が国は、それにふさわしい役割と振舞いが求められるようになりました。我が国の青少年にも、このような観点に立って、地球社会の一員として行動することが従来以上に期待されています。総務庁としても、平成6年度から「国際青年育成交流事業（青年海外派遣及び外国青年招へい）」をスタートさせ、国際協力やボランティアの体験活動をプログラムに採り入れたところです。

総務庁の国際交流事業に参加された方々は、日本青年国際交流機構を組織し、各地域や学校・職

場において、総務庁の事業への協力、外国青年との交流、ホームステイの受入れなど様々な国際交流活動を展開しておられます。こうした事後活動こそは、参加青年が交流事業を通じて得た成果を社会に還元する手段であり、その充実は極めて重要な意味を持っています。

これら事後活動を実りあるものにするためには、既参加青年間のネットワークの確立が不可欠です。各事業ごとの縦のつながり、同期生の横のつながり、地域ごとのつながり、さらに外国青年とのつながりなど、縦横に張り巡らされた確固たるネットワークが機能することにより、効果的な事後活動が力強く展開されていくものと考えております。

平成6年4月に設立された財団法人・青少年国際交流推進センターは、日本青年国際交流機構と連携をとりつつ、事後活動等のネットワークの拠点として大切な機能を果たしていると聞いております。この「マクロコズム」がネットワークづくりの良き媒体となることを祈念いたしまして、私のお祝いの言葉といたします。

日本青年国際交流機構第10回全国大会東京大会

'94. 8. 6(土)～7(日)

商船三井客船「ふじ丸」船上(東京～名古屋間を航海)

日本青年国際交流機構第10回全国大会は、二つの意味で記念すべき大会となりました。一つは、活動組織としての充実を目指してIYEOを設立してから10年の節目に当たること、二つ目は、長年の夢であった法人設立が実現した直後の大会となったことです。

開会式での大森会長の挨拶は、今後の活動の充実に向け意欲あふれるものでした。上村総務庁青少年対策本部次長からも力強い激励の言葉を含めたご挨拶をいただきました。センターの山田理事長が、第16回青年の船管理官の経験を踏まえ、熱意をこめてセンターの今後を語ってくださったことは、私たちにとって心強いものとなりました。また、第16回青年の船団長をされた坂本先生の「ボランティア活動について」の講演は、改めて活動の大切さを確認させていただきました。

「第6回世界青年の船」及び「日・韓青年親善交流」事業参加者からの発表は、とても実感がこもった内容で「もう少し聞きたかった」という声が出たほどでした。「世界青年の船」の谷口さん・盛林さん、そして「日・韓青年交流」の慶野さん・小林さん、ありがとうございました。

出航の際に船が岸壁を離れていく感動のシーンは、わずか一晚のクルーズでも変わりませんでした。夜は慣れない着席でのディナーに戸惑った人もいたようですが、食後のビンゴ・ゲームでの盛り上がりはなかなかのものでした。翌朝は「もう少し船に居たい」との思いを持ちつつ下船しましたが、名古屋の39.5度という暑さにびっくり！

来年の「大阪大会」は11月。紅葉の季節に、また会いましょう。
(大橋玲子)

あいさつをする大森会長



日・韓青年親善交流の慶野さんと小林さん



MABUHAY !

(フィリピンからのメッセージ)

AMINA T RASUL-BERNARDO
SSEAYPAA, Inc. President



The founding of the Center of International Youth Exchange signals another milestone in the continuing efforts of Asian youth leaders to organize and spread message of goodwill around the world.

The youth of the Philippines, particularly members of the Ship for Southeast Asian Youth Program Alumni Association, (SSEAYPAA) Inc. walk hand in hand with the young leaders of Japan in renewing its commitment to the true ideals of brotherhood among nations. For we believe that on this same perspective can we only look forward to the future and learn from the images of the past, as we endeavor to promote further interdependence, mutual respect and productivity in all aspects of our life.

Let us continue to plant the seeds of friendship. In all possible venues, let our heart speak of the idealism of the young. Let us be more conscious of what we bonded together can contribute our society's development and growth. To the Center for International Youth Exchange, Congratulation ! Gan batte kudasai ! Mabuhay !

この度、財団法人青少年国際交流推進センターが設立されましたことは、アジアの青年指導者たちにとって、国際親善の輪を組織し発展させる上で大変画期的なことです。

フィリピンの青年たち、特に「東南アジア青年の船」フィリピン同窓会会員は、日本の青年指導者と協力して「国家間の理想的な友好関係とは何か」を求め続けております。将来への展望を同じくしてこそ、私たちは、未来に期待し、過去の事柄から学ぶことが出来ると信じています。ですから私たちは生活のあらゆる面で相互依存や相互理

解を深め、生産性を高めるよう努力しています。

友情の種を蒔き続けましょう。機会あるごとに青年の理想を心から語りましょう。私たちが、手をつなぐことで、社会の発展や成長にどのように貢献出来るかもっと考えましょう。

青少年国際交流推進センターの設立、本当におめでとうございます。頑張ってください。

マブハイ！

SSEAYP フィリピン同窓会

会長 アミナ・ベルナルド

(訳：坂本文子)

— SSEAYP インターナショナルについて —

SSEAYP インターナショナルとは、総務庁の行う国際交流事業に参加した日本青年の事後活動組織である日本青年国際交流機構と「東南アジア青年の船」事業に参加したアセアン青年の各国同窓会組織により 1987 年に設立された国際連携組織である。毎年 1 回の総会を各国持回りで開催しているが、今年が日本が主催国となり、4 月末に定例

の総会とともに国際家族年を記念して「インターナショナル・ユース・フォーラム」と「アジアのこども絵画展」も併せて行い、日本でのアセアンへの理解を深めることに努力した。特に「アジアのこども絵画展」は、東京での開催の後に 15 都道府県で順次行われ、各地で好評を得ることができた。来年の総会はマレーシアで開催される。

フィリピン同窓会の活動の輪が広がる

(SSEAYP フィリピン同窓会より)

昨年、アラネタ・センターとシタン・タングローのストリート・チルドレン達に絵を教える活動を催しました。この企画に参加した学生達によってフィリピン同窓会の活動は広がり始めました。美術やスケッチ、色塗りを教えることは、教える方にも教えられる方にも双方に影響し合うものです。今年2月、日本・フィリピン友好月間を祝ってフィリピン同窓会ではストリート・チルドレンに折り紙を教えました。この催しは、コン・サンギド部長が担当し、日本の東ア船のOBである山内昭人ご夫妻・佐藤さん・後藤さん・大久保恭子さんほか日本女性の方々に教えていただきました。次から次へと様々な折り方が紹介されました。子供達は絵画教室の時のように再び芸術心を刺激されたようでした。子供達が喜んでたくさん作ったので、先生達が折り方を全部紹介し終わらないうちに折り紙が無くなってしまい、折り紙教室はおしまいになりました。

紙といえばアミナ会長が、ウェスタン・フィリピン・プラザ・ホテルからコーヒーショップの使用済テーブル・マットとクレヨンの提供を受けられるように交渉してくれました。この紙は、公立小学校の児童やストリート・チルドレンが画用紙として使います。テーブル・マットが画用紙になるのです。使用済といっても、きれいで、使えるものがほとんどです。

今年8月12日、同ホテルの「スルルーの間」で簡素な式典がありました。ウィルフレッド・パラオ支配人が三つの公立小学校とシタン・タング

ローに毎月寄付することを申し出てくれており、その第1回目の授与式でした。この席で、引続き「アジアのこども絵画展」の入賞者表彰も行いました。日本大使館からは、樋口勉二等書記官とチャーリー・サイル氏の出席を得て、フィリピン同窓会会員をはじめ、マニラ・レガータ小学校ネオイタス・ディアス校長、マンダルヨン・ハイウェイヒルズ小学校エスター・ビルリアル校長、ケソン市のピニャハン小学校ロランド・ルバオ校長先生など多くの学校関係者が出席しました。シタン・タングローのローズ・ルソン修道女は入賞したルドルフォ・アルセナスとエドガー・マグネトウと共に出席しました。エデリタ・サガーとジェシー・ブラウンの二名の入賞者と、「織られた夢」のポスターのマスコットを描いた芸術家は、依然消息がわかりません。

この式典は、第19回東南アジア青年の船のオラフ・ゴトラデラ氏が担当しました。

(訳：坂本文子)



国際青年育成交流事業（招へい）

皇太子同妃両殿下の御成婚を記念して、総務庁は平成6年度から新たに「国際青年育成交流事業」のプログラムをスタートさせました。この事業は、日本人青年を世界各地に派遣する「青年海外派遣」と諸外国の青年を日本に招へいする「外国青年招へい」の二つの組み合わせになっており、ともに現地の人々との共同体験交流活動を基本に置いています。

今年度は、7月に14か国の外国青年141名を日本に招へいし、9月には日本青年約70名のジョルダン、タイ、トンガ、イギリス、タンザニアの5か国へ派遣が実施されました。

7月7日に来日した外国青年141名は、東京での「国際青年交流会議」等のプログラムを終えた後に7月12日から23日まで、栃木、滋賀、京都、和歌山、島根、福岡の6府県に分かれて、それぞれ地元青年との共同体験交流、ホームステイ、文化・産業・教育の諸施設の見学等を行うプログラムを体験しました。その後、7月24日から7月30日まで鹿児島県で行われた「国際青年の村'94」に参加し、地方日程を終えて東京に戻り、8月2日に無事帰国の途につきました。

各府県では、県庁表敬、市内の主な施設等の見学、歓迎レセプションなどは共通でしたが、そのほかは工夫を凝らしたプログラムを組んでお国柄を演出していました。ここでは、事業後の外国青年の感想を取り上げて紹介します。



福岡県は、タイ王国とタンザニア連合共和国を受入れましたが、全体で動く部分と北九州・筑豊・三潴・八女の4ブロックに分けたグループ行動の組み合わせで行い、行き届いたプログラムでした。タイとタンザニアの青年の感想をおとどけします。

言葉を越えたコミュニケーション

Angkana Urasawat (タイ)

私には、我々の異なる言葉を通してのコミュニケーションに大きな感銘を感じています。非常に少ない英語で私は話しましたし、日本の人たちも同じようにしました。時々、私たちはほんとうに

我々自身の言葉にボディーランゲイジで話しました。おたがい理解出来た事は驚くべき事でした。ホームステイの折のたくさんの種類のコミュニケーション方法を、私たちは誇りに思っています。たとえば、家族の絵を描いたりそのようなこと、辞書やノートです。それを思うたび、私は楽しさと嬉しさを感じます。

多くを学んだ福岡での体験

Blandina Julius (タンザニア)

福岡には7月12日に到着しました。実行委員会の案内で、県庁を訪問し、知事を表敬訪問しました。

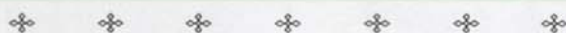
テーマ別参観では地下鉄と放送局に行き、テレビやラジオの放送現場を見るという貴重な体験ができました。

ホームステイでは八女市に2泊しました。はじめは見ず知らずの家族とうまくやれるかと不安でしたが、ホストファミリーはまるで私の両親のように私に接してくれ、楽しく過ごせました。この体験はタンザニアへの貴重な土産話となります。

メニュー型プログラムでも八女を訪れ、博物館を見学し、多くの歴史を学びました。また、八女では農業体験も楽しむことが出来ました。茶畑に行き、お茶の葉が香り高いグリーンティーになるまでの製造工程、また学校訪問で先生や生徒たちと交流が出来ました。

このように福岡の人々との楽しい交流体験を通じて、日本の文化を知ることが出来ましたし、私自身にとっても国際交流のアイデアを得る貴重な機会ともなりました。

今では多くのことを八女市、そして福岡県から学びました。そして行く先々で出会った人々が、とても初めてとは思えないくらい気さくで、魅力的でした。



琵琶湖クルーズ船上にて



談笑する青年達



農業試験場にて実習



船上にて実験中

滋賀県での交流の様子

国際交流の在り方について(講演)

I. 職業人としての国際交流

上智大学法学部教授

猪口 邦子

冷戦の終結と国際交流の役割

今、世界は大きく変わってきています。つまり、第2次大戦後に世界が直ちに冷戦に滑り込んだことを思えば、それが終結したということは、一大転換であるわけです。この冷戦が終結した時代の特徴は、国際交流との関係でどういうものなのかということ、まず考えてみたいと思います。

冷戦時代というのは、世界が軍事国家のものであったといえると思います。基本的に世界を取り仕切っていた論理というのが軍事中心的なものであったということです。軍事は国家に属するもの、国家が独占しているものでありますから、国際交流といっても、NGOとか学生とか市民とか、あるいは一般の職業人とか、そういう人たちの出番が実際にはあまりなかったのではないかと思います。

ところが、冷戦が終結したということは、ここで初めて、もはや軍事だけが非常に重要な国際社会ではなくなり、冷戦下において後回しにされていた様々な問題の重要性が浮上してくるわけです。つまり、第2次世界大戦後の世界が新しい時代に向けて歩き始めたときから、経済問題であれ、環境問題であれ、人権・人道問題であれ、あるいは民主化の問題であれ、もちろん非常に重要であったわけですが、戦後、世界が絶対的に大きな冷戦

という構造に直ちに滑り込んだ中では「そのようなことは重要ではあるけれども、それはさておき」というような論理がなかったわけではありませんでした。ところが、冷戦が終わったということは、冷戦時代に後回しにされていたこれらの様々な重要な課題が、初めてこの国際社会で本当に十分にアドレスされるようになるということではないかと思っています。

そのような問題の解決のためには、国家だけでなく、様々な市民団体とか学生とか職業人とか、個人の資格で貢献できる部分というのが非常に大きくあるので、今、国際交流の役割は、かつてないほど大きいし、またその責任を取らなければならない時代だと思います。言い換えれば、時代は国際交流を志す多くの人たちに味方をしているというふうに言えると思います。

二つの貢献の仕方

そこで国際交流ということ、もう少し考えてみたいと思います。国際交流には、人の人間の中に、大きくわけて二つの貢献の仕方があるのではないかと、私は思います。一つはまず職業人としての国際貢献です。もう一つは一人の市民としての貢献。その双方ともが非常に重要ではないかと思っています。どちらが抜け落ちて、やや残念で



はないでしょうか。職業人としての貢献は、やはり軽視できない重要な側面があると思います。今日、ほとんどの職業分野において、その最先端で仕事をしようとする時には、必ず国際的な接点が出てきます。その職業的な立場からそのプロフェッショナルリズムにのっとり国際的な接点で良い仕事をし、その分野での貢献を果たすということは、紛れもなく重要な国際貢献であろうと思います。また、そのような分野に加え、自分の職業貢献とは別に、ただの一人の市民としてボランティア活動を展開する、ということもまた非常に重要だと思います。一般に国際交流というと、後者だけを思い浮かべる方が多いかもしれませんが、私はやはり職業的貢献を通じての国際貢献も、決して軽視すべきではないと思います。

例えば、経済人として、もし企業に勤めているのであれば、その企業活動の中で国際的接点を持ったときに、そこで誠心誠意相手国にも利益になるような、共にポジティブ・サムに至るような経済活動というのは何かというようなことを、経済人

として真剣に考えてもらいたいと思います。

片や、経済人としては国際協調などを全く顧みずひたすら営利活動だけに邁進し、他方ではボランティア活動等を通じて国際貢献をやるというのでは少し残念な気がします。やはり自分の選んだ職業分野においても国際貢献、国際交流ということを積極的に考える、という職業人としての姿勢を持つことによって、世界の様々な問題はより解決されるであろうと思います。

私の場合は研究者として、学会活動を通じての国際的な接点がたくさんあります。その中で一人の研究者として、国際的にアカデミックな活動の中で積極的に貢献し、国際学会の活動を盛り上げていこうというふうに思います。海外の研究者と共同研究をしたり、海外の大学に教えに行ったり、海外から研究者が来たときに日本で非常に良い研究活動が展開できるようにお手伝いしたり、あるいは留学生が私の大学に来てくれたときには、その方たちに十分な勉学の機会が開かれているように確認したりなど、一人の大学人という職業人としての国際的な接点の中で、フルにその役割を果たしていきたいという気持ちがあります。

貢献の心と専門性による貢献

それぞれの仕事の立場から責任ある国際貢献を行うというのは、非常に重要な国際交流の一つの出発点であると思います。その際に言いたいことは、専門を持つということは素晴らしいということです。国際交流をするときに、善意とか心だけでは、人々に最終的な救済の手を差し伸べることはなかなかできないかもしれません。

日本では国際関係論が最近非常に人気のあるテーマです。私の大学でも後輩たちが大学を見学に来て、中学生とか高校生で、「私は国際関係論を勉強したい」と言う人がたくさんいます。私はそういう人達に、「それは非常に素晴らしいことですね。けどどうして国際関係論を勉強したいと思ったのですか。」と尋ねます。例えば南北問題を解決するために国際関係論を勉強したいという人がたくさんいますが、そういうときに私が言うことは、「国際関係論を勉強するだけで南北関係を救済することが出来るだろうか。途上国の様々な問題を救済することができるだろうか。」また、「あなたは、具体的にどういう専門性をもって、途上国のどういう病理を救済したいと考えているのか。」とも問いかけます。「ただ勉強する、つまり、そういう問題が存在するというのを勉強するというだけでは、それほど大きな役割を果たすことはなかなかできないかもしれない。」ということ、後輩である日本の中学生や高校生たちに言うことがあります。

やはり専門を持たなければ、いくらそれを憂える気持ちがあっても、実際の社会問題の大きさの前に何の為す術を持たないというような事態になりかねないと思います。「それでしたら、医者になってはどう、看護婦さんになってはどう、あるいは技術者になってはどう。そうすればその専門をもって、途上国の問題や先進国の社会の問題などに対して、自分なりの答えを何か出すことができるかもしれない。国際的にそういうチームで協力しながら誰かを救済することが出来るかもしれない。その問題を考える気持ち、頭脳あるいは心というものと、何か自分で直接その問題解決にお

いて貢献できる専門性というものと、その両方を持ったら良いのではないかしら。」というふうに問いかけることがあります。

世の中にはいろいろな職業があります。その全ての職業が何らかの形で今の世界に役立っていると思います。もしそういう視点から自分の職業を考えてみれば、職業人として国際交流に資するような立ち回り方というのも当然出てくるであろうと思います。まだ皆様は年齢が若いと思いますので、これから更に専門性を磨いて、法律家としてでもいい、医師としてでもいい、あるいは技術者としてでもいい、企業人としてでもいい、何らかの形で直接問題解決に貢献できるような専門というものを身につけてほしいと思います。

しかし、一方でそういう専門を身につける過程において、その職業分野だけの競争原理などだけに捕らわれて、国際交流の心が後回しになってしまう、どこかに置き忘れてしまう、そういうことがあってはならないと思います。ともすれば、実際にはそういう人が多くなりがちだと思います。若いときには国際交流の志を立てて何らかの職業につき、しかし、40代、50代ともなるとその職業分野のことだけで非常に忙しくなったり、その中の競争原理に捕らわれて、いつしか最初の頃の志を忘れてしまったというようなことがないよう



しなければならない。その双方、つまり心と専門性によって国際交流を推進していくということが、職業的貢献という場合において不可欠だろうと思います。

ラセット教授に学んだ国際交流

私自身のことについては、研究者として色々私の出来る限りの職業的な立場において努力していると申しましたが、そうしようと思うようになったのも、私自身が海外の方の職業的な国際交流の意識に助けられてきたからであります。

私の場合、ほとんどの専門教育をアメリカで受けました。イエール大学というところで勉強し、後に、ハーバード大学にも行き、あとヨーロッパではジュネーブ大学でも勉強しました。日本から一人の女性がそういう大学にポツンと行くと、もちろん中には開明的な方はたくさんいますが、やはり、彼女は何しに来たんだろう、という奇異の目で見られる方もたくさんいるわけです。そういう中で私を指導してくれた、指導教官、イエール大学の場合ブルース・ラセットという国際的にも有名な国際政治の学者なんです、彼はまさに専門的見地から私が職業人として立派に育つように、継続的に絶え間ない努力によって、私を育ててくれました。もしその教授がいなかったら、私が国際政治をやり通すことはなかなか難しかったかもしれません。

というのは、今ではだいぶ良くなりましたが、当時の日本では、女性が国際政治を目指すということは非常にまだ稀なことでした。国内での教育の機会、ましてや就職の機会、研究活動の機会と

いうのは非常にまだ限定されていました。国内では、「女性なんだから、そういうことはしなくてもいいんじゃないの。」というような声ばかりが多かったわけです。しかし、アメリカに行ったとき、その指導教授は、「女性も積極的に戦争と平和の問題を考える責任がある。あるいは成長と低迷の問題を考える責任がある。」ということ私に説き、また専門的・技術的にも高い水準のものを、私が修めることができるように指導をしてくれました。

いったん学位を取って日本に帰って来たときに、日本ではなかなか就職もままならず、難しい局面がありました。その時にも手紙を通じて、あるいは共同研究に参加しなさいという形で、私が落ち込まないように、また、日本に帰ってきてもその専門分野を放棄することがないようにと、フォローアップまでしっかりなさってくださいました。その時の私は必死でしたから、お礼の気持ちなども十分に持ち合わせていなかったと思います。今になって考えてみると、さまざまな逆境のなかで支えてくれたのは、何ととっても、このイエール大学のブルース・ラセットという教授の支援と指導と、その積極的な働きかけではなかったか、というふうに思います。私にとって絶対的に重要であった国際交流を、教授はまさに職業的専門的な観点から行ってくださったわけです。

(以下次号に続く)

これは、'94年7月11日の国際青年交流会議での講演内容をまとめたもので、第4号まで連載の予定です。なお、猪口教授は、当センターの評議員です。

やっぱあ～ 山口が ぶちおもしろえ～！
 —「いきいき・ときめき」活動で
 国際理解から地域づくりへ—

山口県青年国際交流機構

会長 中野 智昭

（助）青少年国際交流推進センターの発足後、初めて発行される情報誌に我が県の活動を紹介できることを大変に感謝しますとともに、ぜひ我が仲間の国際交流にける意気込みを知っていただきたいと思います。また、近年の情報化社会の中で、逆に身近なことが良くわからないと言われていますが、山口県内の諸活動が各地域での活動の参考になれば、これほど幸いなことはありません。

I 山口ってどんなネットワーク？

県内を8ブロックに分割し、それぞれが独自に地域と密着しながら国際交流事業や各種イベントに参画しています。

〈ブロックの特徴は？〉

- ①独立した事業を地域で展開している。
- ②予算管理は1ブロックごとに自主運営
- ③ブロックのリーダーは、誰でもできる。また海外派遣事業経験者にこだわらない。
- ④興味のある方は、老若男女構わず入会できる。
- ⑤他のグループと独自のネットワークを持っている。（幅広い人脈を確保している）
- ⑥地域行政担当者といつでも連絡が取れる。（日頃からの人間関係を構築している）
- ⑦何でも自分たちの活動として取り込んでしまう柔軟さを持っている。（優柔不断？といわれるが、これが人脈を生む！）etc....

II 古い体質からの脱却を宣言！

- ①行政に頼らない自主活動と運営を行う。
- ②過去の栄光（海外派遣事業に参加したという自負心）を捨てる。自分は貴重な体験・経験ができたという謙虚さが本当の地域への貢献。
- ③定例会の廃止。本当に必要なときブロック長が

集合し協議を行う。（日常は電話・FAXで）

- ④地域に必ずある自分たちのニーズを的確に把握していること。
- ⑤活動の出来る方とそうでない方（サポーター）とを的確に区別している。

III 活動資金の確立と助成事業の受託

3年間の自助努力と、事業展開における助成措置の活用により、現在では年間1回は必ずバスをチャーターして、中国ブロック大会の参加（来年は岡山県）や研修旅行を実施するまでに成長した。

IV 活動への取組み状況について

- ①全体での取組み（平成6年度）
 - ★総務庁の日中青年親善交流招へい事業の受入れ
 - ★山口大学・留学生「第2の故郷づくり」事業の企画実施
 - ★県国際交流員との共同企画事業（韓国大学生スタディーツアー）の実施運営
- ②各ブロックでの取組み（県内各市町村から評価をいただいている主な事業）
 - 〈柳井〉 「白壁」国際交流事業／経済交流圏における留学生のための第2の故郷づくり
 - 〈徳山〉 「みかん」交流事業／中国・黒龍江省

との定期相互交流と併せ留学生との民泊受入れ
〈県央〉 国際理解教育推進協議会の事業運営
* 山口市教育委員会からの受託事業（3年継続）
山口東アジア映画村の企画運営
* 年間を通じて東アジア諸国映画作品の上映等
〈宇部〉 山口大学工学・医学部留学生との定期
交流
〈下関〉 下関アジア映画祭の運営・協力
* アジアマンスに合わせたアジア各国事情紹介
を兼ねた作品の上映

③県内諸団体との連携・協力

〔山口県国際交流協会、山口県青年団体連絡協議
会、山口県各国友好・親善協会などと連携活動

④山口国際理解教育情報センターの設立

国際情報化社会に柔軟に対処するため、11月
6日(日)に西日本・瀬戸内圏と世界をネットする
情報集積・発信拠点を設立する。

〔所長：中野智昭 事務局長：荒瀬澄枝（協力
隊を育てる会・事務局長）〕

「ザンビア日本子ども美術館」体験学習会の開催

実施日：平成6年6月8日(水) 10:00～12:30

開催場所 山口市立大殿小学校・講堂

協力団体等：山口市、山口市教育委員会、山口市社会教育委員・研究部会、山口市国際理解教育推進協
議会、山口県協力隊を育てる会、青年海外協力隊山口県OB会

受講対象：5学年児童 144名、学年主任・担任 4名

目的と内容：アフリカ・ザンビア共和国では、市販の画材は入手困難であるが、子供たちは学校や遊び
場等で様々な素材を転用し、文字通りゼロからものを作っている。その作品を青年海外協
力隊隊員や協力隊を育てる会の支援と協力のもと、日本に運び、展示し、開発途上国に対
する理解と認識を深めてもらうものである。その中で、5学年児童に、身の廻りにある廃
材を自分で集めて作品作りに取り組みさせることで、環境についての理解と、外国の子供た
ちの状況や生活を感じ、これからの生き方や考え方にインパクトを与える。



子供たちは、おもしろおもしろに
グループを作り作成に熱中！
先生も夢中になって……。
新聞・報道各社が一堂に集ま
り、その取材にびっくり!!
こんな授業が楽しいと、ある
子供が語ってくれました。

各地の活動紹介

「みやざき」の女性パワー

宮崎県内で、国際交流活動を地道に行っているグループとして 宮崎友情の架け橋 (Miyazaki Bridge Of Fellowship 略称 MBF) を紹介したいと思います。会長の加世田知子さんからいただいた原稿です。

(宮崎県青年国際交流機構副会長 荒武千穂)

「宮崎友情の架け橋」は、1982年の国際青年会議所アジア太平洋会議で通訳コンパニオンとして働いた有志によってつくられた、女性による語学ボランティアの会です。宮崎に来県または在住の外国人が、より快適に暮らすために協力し、外国の方々との交流を通じてお互いに理解し、さらに様々な出会いの橋渡しをすることを目的として始まりました。現在、会員は41名で、教師、会社員、公務員、塾教師、主婦など職業も様々、年齢層も20代から40代に渡っています。会長は、初代が杉本サクヨ、それから松井洋子、肥田潤子と続き、この4月から加世田知子が引き継いでいます。MBFの活動内容としては、月に1回の例会、月刊の英文ニュースレター「What's Going On」(映画、テレビ番組のガイド、行事、伝統文化の紹介等を載せたもの)の発行、春と秋のバザー、忘年会パーティの開催があります。そのほか、翻訳、通訳なども引き受けています。次に、主な活動内容について、具体的に説明したいと思います。

◎英文ニュースレターについて

記事は、外国人にも投稿して戴き、反響があったときは、講演会を開き、交流の場にもしたいと考えています。発行は月500部で、宮崎駅や空港の案内所、宮崎県観光振興会や東京の国際観光振興会などの窓口に置いています。また、在住外国人や留学生に無料で配布しています。

◎バザーについて

以前は、会員中心に年1回の開催でしたが、ここ2～3年は、留学生を対象に年2回開催し、リサイクル品を主体として、日用品、衣類、家具などを提供していますが、いつも大盛況です。会員だけでは品物を集めるのに限界があるので、最近では他の団体にも呼びかけています。

◎忘年会パーティについて

年1回、留学生を招待し、会員の手作り料理をメインとして開催しています。毎年、日本人、外国の方々あわせて200名くらいの参加があります。

このほか、アマチュアのサーフィン大会等、各

月に一度の例会にて



種の国際大会が宮崎で開催される際には、ボランティア通訳等を引き受けています。昨年は、世界ベテランズ大会（※）が、宮崎で開催されましたが、メンバーのほとんどが、ボランティア通訳、ホームビジットのお世話等で活躍しました。

今年も、ベテランズ大会のような大きな行事がないので、この春に一般市民を対象に公立大学のスタンレー先生の講演会「最近のベトナムの変貌」を開催しました。講演会後のパーティでは、参加者からの貴重な体験談もあり、思わぬ収穫がありました。今後、年1回の割合で、このような講演会を開催していく予定です。

宮崎では、留学生の数が年々増加しておりますが、国籍も、アメリカ、オーストラリア、バングラディッシュ、インドネシア、マレーシア、スリランカ、エジプト、ガーナと様々です。イスラム教徒の方が多く、キリスト教文化とともに、イスラム教文化への理解は欠かせません。日本人の宗教に対するおおらかさからは、想像もつかない世界を発見することがあります。食生活、日常生活すべてを神に律せられている世界の厳しさを感じる一方、国を超えての宗教の団結力の強さにも驚かされます。バザーを通して、物に対する価値観、金銭に対する価値観、売買の交渉の仕方などの違いも知ることができます。

留学生について、「留学生は恵まれている。経済的にゆとりがある。何も援助する必要はない」という考え方と、「あの人たちは可哀相、何かしてあげなければ」という考え方の両極端があります。しかし、彼らが必要としているのは、今の現況についての的確な情報と異文化の中でどう対処していくかについてのアドバイスです。私たちも留学生を様々な形で援助しているつもりですが、私たちのアドバイスにもかかわらず、挫折し、帰国せざるを得ない人もいます。

私たちは、様々な活動を通して、ボランティア精神、グローバルな見方、異文化や異世代間の交流のあり方、組織的な活動の仕方を学ぶことができました。十分な活動を行うためには、日頃の研修も欠かせませんが、女性だけのグループだけに家庭生活や仕事との両立などの問題もあります。現在、宮崎でも、国際交流の団体の数が増え、各団体がその中でどう独自性を持つかを問われています。私たちの活動は、決して華やかなものではありませんが、継続することに意義があると思っています。これからも、さらにいろいろな出会いを大切に、他の団体や人々との交流を深め、活動を進めてゆきたいと考えています。

（会長 加世田知子）

（※）世界ベテランズ大会

現役を退いた世界各国の陸上競技愛好者たちのスポーツの祭典。

昭和50年にカナダで32か国1,400人が参加して開かれて以後2年に1度開かれている。出場資格は、男子40歳以上、女子35歳以上。宮崎では、1993年10月7日から11日間にわたって県総合運

動公園で開催され、71か国から過去最大の11,475人が参加した。

〈M B F 連絡先〉

会長：加世田 知子

住所：〒889-16 宮崎県宮崎郡清武町大字船 3119

☎：0985(85)0237

お知らせコーナー

〈IYEOの皆様へアンケート調査のお願い〉

この度、総務庁の国際交流事業参加者に対して事後活動についての調査を11月に行う予定です。これは、総務庁青少年対策本部の委託を受けて、日本青年国際交流機構の協力の下に行うものです。

調査票が届きましたら、速やかに回答してください。よろしくお願いいたします。

〈原稿をお待ちしています！〉

マクロコズムは、多くの方からの原稿をお待ちしています。国際交流活動に頑張っている方は是非あなたの活動を紹介してください。これから何か始めたいという方は、その思いを文字に送ってください。どんな情報が欲しいかリクエストして下さい。国際交流に関心のある全ての人に役立つ情報誌にしていきたいと思えます。

編集後記

大変な仕事を仰せつかり、おおいに戸惑い右往左往しました。「国際交流」に関係のあることから何でも、世界中の老若男女あらゆる方々からの

*本誌の年間講読をご希望の方は、(財)青少年国際交流推進センターまで葉書又はFAXにてお申込み下さい。年間講読料は1,500円(郵送料含む)です。

インフォメーション

〈著書紹介「マレーシアにんげん事情」〉

「第11回東南アジア青年の船」参加青年の樋口直美さんが、ご主人の転勤で2年間在住したマレーシアでの日々を政治・経済から日常生活に至るまで、素直な視点で綴ったものです。

東南アジアの世界とは、東ア船での友人も含めて多くのおつきあいがあった筆者でしたが、生活していく中でマレーシアの人々から受けた温かさが、この素敵な本を生むきっかけになりました。「マレーシアに住めば住むほど「日本人はアジア人だ」という認識は、私の中では強くなる。

私が、無意識の内に日本独自の文化風習だと思っていたことの多くを、マレーシアや近隣諸国で見ることができるからだ。……本文より

著者：柴田 直美(本名 樋口直美)

発行所：(株)三一書房〔03-3812-3131~5〕

投稿をお待ちしています。(めぐ/モン)

24ページの編集は、なかなかシンドイのですが、今後を楽しみに…。(Y/O/K/R)

MACROCOSM(マクロコズム) 11月号 Vol.1 1994年11月発行(隔月発行)

編集：マクロコズム編集委員会

発行：財団法人 青少年国際交流推進センター

〒103 東京都中央区日本橋人形町2-35-14

TEL 03-3249-0767

FAX 03-3639-2436

編集協力 総務庁青少年対策本部

日本青年国際交流機構

定価：195円(本体189円)

印刷所：絢文社

TEL 03-3959-3960

世界の国際交流活動

世界には、ユニークな国際交流活動が数多く行われています。このコーナーでは、IYEOのメンバーからの情報によって様々な活動を紹介していきます。今回は、「第3回東南アジア青年の船」の参加者である本橋誠さんが、力を入れている活動をご紹介します。彼は、「Up With People」の日本同窓会会長であり、この活動の振興に精力を傾けています。（文責：大橋玲子）

Up With People

1965年、アメリカのJ. Blanton氏によって始められましたが、1968年に非営利を目的とした国際教育団体として法人化され、コロラド州デンバー郊外ブルームフィールドに本拠地を置き、現在5か国に組織を持っています。

「Up With People」は、世界20数か国から集まった18才から25才までの若者が、1年間ともに生活をしながら、色々な文化・生活様式を経験し、肌で学ぶ国際交流プログラムです。各地でショーパフォーマンス公演のほか、地域活動に従事したりホームステイを行いながら、実地体験を通じて実社会でのリーダーシップ、奉仕の精神、国際的な視野を身につけ、国と国との相互理解を深めることを目的としています。毎年約700名が参加し

ますが、半数以上はアメリカ合衆国外からで、日本からは毎年15名程度が参加しています。

発足以来、これまでに世界60数か国から13,000名を超える青年が参加してきました。

〈活動の歴史〉

設立以来、訪れた場所は、中国・旧ソビエト連邦を含めた50か国、3,200以上の市町村に及びます。ニューヨークのカーネギーホール、ロンドンのロイヤルアルバートホール等の検舞台での公演も数多く行い、ミュンヘンオリンピック、オーストラリア万博、リオデジャネイロにおける環境サミットでの公演等幅広い分野で活躍しています。



アップ ウィズ ピープル
日本オフィス
代表 宮脇 真一
☎150

東京都渋谷区広尾2-15-9

TEL 03-3400-7495

FAX 03-3400-7496

日本青年国際交流機構第10回全国大会東京大会



於・ふじ丸船上（東京→名古屋）1994年8月6日～7日